
知らない千冬がいる世界

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない千冬がいる世界

【Zコード】

Z8076W

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

織斑千冬になつてから様々な事があるな。友人が世界を変えたり、弟が男で唯一ISを扱えたりと。私自身ブリュンヒルデなんて呼ばれている。まったく、平穏が無いな。

HSの始まりだ（前書き）

すみません、現在もの凄い勢いで迷子になつてこる、ネット削除です。
なんかもつ、なーんにも考えてないかも。
ではでは、そんなやる気の無いだらけた作品をどうぞ。

HSの始まりだ

今日は良い天気だな。

雲一つ無い青い空にぽつんと浮かびながら思つ。
まもなく良い天気がガラリと変わるのだが。外干ししている方は心
配しなくて良い。雨が降るわけでは無いのだから。
では、何が降るのか？

「ちーちゃん、そろそろ来るよ。全力でバンバン落としちゃってね

私の元に友人から気楽な通信が来る。

あまりに緊張感が無い声を聞くとため息が出てしまつ。

私達がこれから行うことは世界に絶望と希望を与える大事なのだが、
首謀者が理解しているのかしていないのか？
もし、理解していないなら間が抜けている。理解しているなら、も
う少し罪悪感を持つてもらいたい。

「見えてしまつたか」

遠い向こうの空から幾つもの点が見える。

ハイパーセンサーが作動して私に点の群れが何なのかを教えてくれ
る。

強化された視力が点の正体をミサイル群だと見破る。
認識するとすぐさまブレードを構える。

「これがゲームの類いなら気楽にやれるのだがな」

そう愚痴りたくなるほどの数のミサイル。

一撃離脱を基本にどこまでいけるか？

田を開じて深呼吸を2回する。精神を安定させてから田を開けて集中する。

「ハアアアーー！」

全てとは言わないが、ほぼ撃墜させても「うーーー！」

一番始めに私の射程内に飛び込んできたミサイルを切り裂き、すぐに次のミサイルに向かう。

出来る限り誘爆させて数を減らしていく。

時にはミサイルを蹴つて加速して次を破壊する。

対応が間に合わず、何度かミサイルに激突したのだが、バリアーのおかげでダメージ自体はほとんど無い。しかし、ミサイルが命中して平気でいられるほど私は図太くない。心臓は早鐘を打つ。同時に言葉に表せられない高揚感が私をミサイル群に突撃させる。

これが私、織斑千冬と篠ノ之束の起こした白騎士事件の始まりだった。

馬鹿ばかりだな、このクラスは（前書き）

話に繋がりが無いかも

馬鹿ばかりだな、このクラスは

「まつたくお前は。もう少ししだけ中身のある自己紹介は出来ないのか？」

一年一組の教室に入ると教卓に背を向けて挨拶をしている我が弟の一夏がいたので注意をする。

「ち、千冬ねえ！？」

私の注意を聞いて振り向いた一夏。
……そこまで驚く必要は無いだろう。

「この場では織斑先生だ。良いな、分かつたか？」

あまり公私混同してはいけないからな。

「あ、ああ」

「返事は『はい』だ」

まったく、初めての学校では無いはずだぞ。

「私がこれから短い間で君達を使い物にするために様々な事を教える織斑千冬だ。先のやり取りで分かるかも知れないが、此処にいる織斑一夏の姉だ」

しーんとした謎の間。そして沈黙を破るよつてクラス中から黄色い声があがる。

卷之三

一本物の千冬様よ！！「

本物で悪いが？

お姉様、で呼はせてください!!」「

私は薫で手一杯だから、他をあたれ。

「お父さんお母さん、産んでくれてありがとう」と、今言いたい...」

それは然るべきaday三三ヶで面と向かひて書ひへもたゞ

和のハナコは毎年馬鹿にかく集まるが、いじが済む作務のが手を借りる

キャラ一いつとさらなる盛り上がりを見せたクラスに私は呆れ半分諦め半分の状態だ。

「山田先生、ご苦労」

私が来るまでの間、馬鹿者達を相手していくってくれて。

い、いえ、仕事でしたから

顔を赤らめて言う山田先生。

……君もか。

もはや溜め息しか出ない。

「これから君達にE.Sの基本動作や理論を叩き込んでいく。私への返事は『はい』か『分かりました』だ

私が何かを喋る度にクラスから黄色い声があがる。

だから私は出席簿持つて手近でやかましい生徒の方へ行く。

瞬時に出席簿を振り上げ少々力を込めて降り下りす。

パン!!

「いー?」

叩かれた箇所を押さえながら痛みに悶える生徒。
その光景を見たその他はピタリと止まった。

「私の言ひことは黙つて聞け。良いな?」

クラス中が必死に頷き始めた。

少しだけやり過ぎたか?いや、ちょうど良いな。

前途多難だな、このクラスは

私が織斑千冬になつて結構経つた。

おかしな言い方だな。だけど私にはこの言い方が一番しつくつくる。こう、自分が何か違う気がしたのだ。昔の話だから今はそんなこと無い。

私が織斑一夏の姉になつてから結構経つたのだが……何故一夏は拳動不審なんだ？時折隣の生徒を見ているようだし。

「織斑くん、何か分からないとこにはありますか？」

やはり山田先生も気になつたか。あまりに不審すぎる。教科書を開いてはいるが、その後からめくる動作が無い。

「先生……」

意を決したのか、声を張り上げる一夏。はつきりと分かる。一夏が何を言つのか。

「ほとんど全部分かりません」

……当たるものだな。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

読んで分からぬなら少しだけ許そつ。読んでいなかつた場合は……叩く。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「……そつか」

「パンー！」

「必ず読めと書いてあつたと思つが……読んで無いなら分からないか」

捨てる物の確認くらいしてほしいものだな。

「はあ、あとで再発行してやるから1週間以内に覚えろ」

あの参考書は再発行が大変で値段が高くてのだがな。

溜め息が出てしまう。

「1週間での分厚いのは……」

「自業自得だ。お前の周りにいるのは、お前の言ひ古い電話帳にせつせと目を通して覚えてきたんだ。ならば、お前も頑張つてやれ」心を鬼にして言う。覚えなければ置いてきぼりをくらつて惨めな思いをするだけだから。

「ISのスペックは現存する兵器を凌駕している。凌駕しているが故に知識の無い者が扱えば大惨事を招く可能性がある。お前の言ひ古い電話帳はその危険を無くすための知識が書いてあるんだ。これからISを扱う訓練もあるのだから、1週間で覚えるくらいの熱意を見せる」

一夏はどこか腑に落ちない様子だ。

「お前は自分が望んで此処にいるわけではないと思っているな」

「一夏、せめてポーカーフェイスを覚える。考えが駄々漏れだぞ。

「望んでいようがいまいが、人が集団から離れて生きていくことは出来ない。だから受け入れる」

決心を固めたのか、やる気が感じられるようになつた。

「織斑くん、分からないとこがあつたら放課後教えてあげますから」

山田先生が一夏の手を握つて救いの手を無理矢理とらしている。

「じゃあ、放課後おねがいします」

チラッと私を見てから頼む一夏。

「教師と生徒が放課後に2人きり。……駄目ですよ、織斑くん。私はまだ男の」

「パン!!」

「山田先生、そろそろ授業の続きを」

「は、はいーーー」

山田先生を強制的に覚醒させて授業の再開を促す。

「織斑も座れ」

「はい！！」

このクラスの生徒達と山田先生は私には荷が重いな。

話を聞かない奴が居るな、このクラスには

3時間目が始まり、私は教壇に立つて教室を見渡す。

「それでは授業を開始」

「そういえばクラス代表を決めなくてはならないな。

「する前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表者を決める」

一夏は明らか分かつていらないな。

「クラス代表はクラス長のことだ。で、クラス対抗戦は入学時点の各クラスの実力を測るものだ。一度決まると1年間変更出来ないからな」

はつきり言えば誰でも構わない。別にクラスが勝つてもボーナスが貰える訳ではないからな。

ところで一夏。関係無いみたいに思っているかも知れないが、お前が一番祭り上げられる可能性があるぞ。

「はい！一夏くんを推薦します」

「私もです」

やはりな。……一夏は自分のことだと気がついていないのか？

「候補者は織斑一夏。他にいるか？自薦他薦は問わない

昔から厄介事は押し付け合いで当たり前だな。自薦する物好きなど居るわけないか。

「俺！？」

「織斑、席につけ

「俺はやるなんて言つてないぞ」

「分かったから座れ

一夏を座らせる。落ち着け、時間は有限なんだ。

「言い忘れたが、他薦された者に拒否権は無い

「あれ？分かったって聞いたんだけど

「気にするな、一夏。私はお前の言い分を聞いただけだ。

「納得がいきませんわ」

立ち上がるセシリ亞・オルゴットと叫ぶ生徒。

一夏と言い貴様と言い、今は授業中なのがな。

「座れ、オルゴット」

「そのような選出は認められませんわ。実力から行けばわたくしが
クラス代表になるのは必然」

なら自ら手を挙げる。

「一度田だ。座れ、オルコット」

「良いですか？クラス代表は実力トップがなるべき。つまりわたくしですわ。極東の猿にされでは困ります」

無視か、オルコット？

「これが最後の警告だ、オルコット。いい加減に座れ」

「大体、文化としても後進的な国で」

「どうか、警告を聞き入れないのかオルコット？ならば然るべき手段を持つてやらせてもらひつ。

「おおお織斑先生、落ち着いてください！？」

出席簿を片手に持つ。

山田先生が私を止めよひと抱きついてくるが、私には関係無いな。

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ」

一夏、お前も私を怒らせたいのだな。

「決闘ですか！？」

「おう、いいぜ！？」

楽しそうだな、2人共。出席簿が粉々になるまで叩いてやるつ。あ

りがたく思つが良い。

「駄目ですよ、織斑先生！？絶対に絶対に絶対に駄目ですよ！？」

山田先生が私を止めようと必死になつてゐるのを見て、私は自らを止める。山田先生に迷惑をかけてまで、馬鹿2人を叩きたいとは思わないからな。

「さて、話はまとまつたな。では、織斑にオルコット。重要な物を渡すから此方に来い」

睨み合いながら、私の前に来る2人。

「よく来たな」

「パーン！パーン！パーン！パーン！パーン！」

オルコットは3回、一夏には1回出席簿を振り下ろす。

「これからは私の言つことに耳を傾ける。良いな、特にオルコット」

少しだけスッキリしたと言つておこうか。

無自覚でよくもやるな、山田先生

放課後になり、私は1年1組の教室に向かう。途中まで書類を片手に持った山田先生が居たのだが、何か悩む仕草をした後、焦った表情で何処かに走つていった。

何処かと言うが、行き先は私と同じだ。

用件は一夏の暮らす部屋についてだ。

まあ、山田先生が一夏を足止めしていることを祈りながら、ゆるりと行くとしよう。

教室に着いた時に視界に入つたのは肌が触れ合つくりいの距離で話をしている一夏と山田先生。

君は時折無自覚ながら大胆だな、山田先生。

「あ、荷物なら」

フム、部屋についての説明は終わつたのか。

「私が手配しておいた」

何故か驚いているな、一夏。

「千冬ねえ」

「織斑先生だ」

お前は聞いた事をすぐに忘れるのか？姉として心配になるが。

「手配したが、生活必需品と着替え、携帯電話の充電器くらいだ。他に必要な物があれば、手間かも知れないが休日は自宅から持つてこい」

一夏が何を必要としてるか分からぬのに、当てずっぽうで持つていつて要らない物だつたら迷惑になるからな。一夏には悪いが自分でなんとかしてもらう。

「大浴場がありますが、織斑くんは今のところ使えません。部屋についているシャワーで我慢してください」

「え、なんですか？」

……少しあはれえ。

「はあ、同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？まあ、お前も男だからな。少しくらいはそつ言つ考えもあるだらつ」

「織斑くん、女子とお風呂に入りたいんですか！？」

「いや、入りましたくないです」

必死だな、一夏。

「女の子に興味がないんですか！？それはそれで問題のよつな」

極論を展開して話を誤解を招く過激な発言をするな、山田先生。……

……私からしてみれば君の考え方方が問題だ。

ところで山田先生。君の軽はずみな発言で私の弟が酷い誤解を受け

ているのだが。

「それじゃあ私達は会議があるので」

見事に場を荒らすだけ荒らしていつたな。
私も行くかな。

「山田先生」

1年1組からだいぶ離れた廊下で山田先生に声をかける。

「はい。何ですか織斑先生」

嬉しそうに振り向いたな。

だから、山田先生の頭に右手をポンと置く。

君が今何を思つているかは知らないが、残念なお知らせだ。

「もう少し自身の発言について考え欲しいのだが」

アイアンクロード！！

「痛い、いいいい痛いです！！」

大丈夫だ、私は痛くない。

口はわざわざこのもとで書いが本当だな

あかられまごぐつたりして いるな、一夏は。

まだ2田田の授業だといつのに大変だな。

学校の授業と言つものは集団で行われるものだから、躓いた者などに構う」とは基本的に無い。たとえ山田先生であつても。

山田先生は多少詰まる部分もあるが授業を進めている。
一夏は分からなりに頑張つて教科書を読んでいる。

まあ、頑張れよ。

「なんか体の中をいじられてるみたいで怖いんですけど」

授業内容で気になることがあつたのだろう。女子生徒が質問してきました。

「難しく考えなくていいですよ。例えばプログラマーですね。あれはサポートしてくれます。人体に悪影響はありません。ですが自分にあつた物を……」

山田先生は一夏と田が合つと停止してしまった。

その例えはあまりおすすめできないな。

「居たんですか、織斑くん！？」

私の記憶では、最初から今まで一度も居なかつた事はなかつたが。

「えっと、その、織斑くんはしていないから分かりませんね。あはは……」

あー、なんだらうな？一夏よりも周りの女子達の方が意識しているのだが。

授業もストップしてしまったな。……主に山田先生が原因で。これは、私がなんとかしなければならないのだろうな。

「山田先生、授業の続きを」

少々力を込めて山田先生に授業再開を呼び掛ける。

「は、はいー？」

私の言つた事を一瞬理解してなかつたな、あの返事は。まあ良い。授業が動きだしたのだから。

「EISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください

「先生、それって彼氏彼女のような感じですか？」

ああ、お前がそれで良いなら良いくと思つた。

「そ、それは……その……ビリビリショット私には経験がないので分かりませんが」

はあ、軽くいなして授業を進めて欲しいところなのだが。

赤面するな山田先生。雑談を始めるな女子共。

……一夏、私の方を向くな。あと少しで授業が終了するから我慢し

ろ。私も止める気力が無い。

チャイムが鳴るまでの間、扉を閉じて待つ。

……何故だか山田先生が居ると思われる場所から熱っぽい視線を感じるのだが？

ぱちっと扉を開けると山田先生が顔を逸らすのが同じだった。

たまに授業が早く終わってほしいと思つ私がいるのだが。

あの酷い授業の後のわずかな休みがとてもありがたい。欲張るようだが、もう少しだけ休みたい。

1年1組の教室に入る時、不覚にもそう思つてしまつたな。

「千冬お姉様つて自宅ではどんな感じなの

一夏の周りに女子の集団が居るな。

私はお前の姉になつた覚えは無い。

「え？案外やや

「休み時間は終わりだ」

だから、とつとと散れ。

一夏の周りに居た集団はすぐさま席に着いた。何名か違うクラスの奴が居たが。

「そついえば織斑、お前のT-Sは準備まで時間がかかる

「へー?」

「予備が無い。だから学園で専用機を用意するよ」だから、みんな
と待て」

「……まあで言つてなんだが、一夏は明らかに理解していないな。周り
がやわつこでいるのに。
……なんとなくで良いから分からぬのか?」

「はあ。教科書6ページを音読し」

一夏に音読をせている間、田を開じて暫し休む。

……最近ため息の回数が増えてきたな。

「 禁止されています」

終わつたか。

「読んだ通りだ。理解したか?」

「な、なんとなく」

なんとなく……か。まあ、少しは理解したのだな。

「あの、先生。篠ノ之博士もしかして篠ノ之博士の関係者な
んでしょうか?」

女子の1人が質問してきたな。

さて、言つべきか言わないべきか。……どこかで明らかになるから
ばらしても構わないな。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

私としては初日の自己紹介でばれると思つたのだがな。
淡々と言つたのだが、周りは盛り上がりてしまった。

「このクラス、有名人の身内が2人もいる……」

そうだな。あくまで身内だがな。

「篠ノ之博士ってどんな人！？やつぱ天才なの！？」

天才だから、指名手配されていながらも捕まつていらないんだ。

「篠ノ之さんも天才だつたりする！？」

そのような事は言つた。

「あの人は関係ない！！」

篠が声を張り上げて否定した。

それで思い出したのだが、今は授業中なのだ。

「いい加減授業を始める。山田先生、号令を」

私がこの騒動を巻き起こしたのだが気にしない方向で行こうか。

眼中に無いとまじの事が

クラス代表を決める対決の日になつた。
私は不安に思うことがある。

あのオルコットが宣戦布告してから1週間経過したのだが、どのアリーナでも一夏が練習している姿がなかつた。山田先生に確認したところ、打鉄の貸出申請すらなかつた。

やる気が無いのか、諦めたのか？

前者だろうが後者だろう、そんな理由なら小遣いは無しだ。
もしも、私が知らないところで絶え間ない努力をしているのであれば……まずは褒めよう。

……気がついたら先ほどまで私の前を歩いていた山田先生が遠くの方にぽつんと見える。

まあ良い。私はゆるりと行くか。

第3アリーナのAピットにたどり着くと、呼吸を止めて顔を赤くした山田先生とたぶん山田先生をそそのかした一夏と2人のやり取りを睨み付けている筹が居た。

……とりあえず山田先生はそのまま置いてほしい。場を異常に乱すからな。

「ふはあ……まだですか！？」

……君がなんで教師になつたのかとても気になる。

「はあ、こんなんだが一応田上の人間だ。少しほ敬意を払え」

視界の端に涙目の中田先生が映るが無視する。

「……千冬ねえ」

「織斑先生だ。次間違えたら即くからな

私の言葉にホッとした様子の一夏。

「ところで、来ました。織斑くんの専用HS-1.」

謎の復活を遂げた山田先生がはしゃぎながら一夏に言つ。

「すまないが、ぶつつけ本番でものこじり」

アリーナの使用時間が限られているからな。時間は無限じゃないんだ。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせん

軽く乗り越えてみせるとは、難しい事を軽く言つた、筈。だつたらお前が代わりに挑戦するか?

「は?あ?え?」

3人がかりで言い過ぎたな。

「「早く」

「気にするな。 なんどやれ」

現れたのは白いHS。 白以外の色など無い純白。

「これが織斑くんのHS『白ズ』ですーー！」

山田先生が嬉しそうに語るが、一夏は唯それを見つめているだけだ。

仕方ない。

一夏の額を軽く小突いて意識を戻す。

「兎に角体を動かせ。すぐに装着しろ。フォーマットとフィットティングは試合の最中でやれ」

私の言葉を聞くと一夏はHSに触れる。

一夏がHSに体を預けると装甲が閉じて一体化する。

「ハイパーセンサーは問題無いな。気分は悪く無いな、一夏？」

「大丈夫、千冬ねえ。 いける」

とつとつ一夏がHSを手にしてしまったな。

「千冬ねえ」

目を閉じて考え方をしていくと、一夏が話しかけてきた。

「どうした？」

田を開けると真剣な眼差しをした一夏が映った。

「行ってくる

「わづか、行ってこい」

そのせり取りを終えると一夏はゲートへ進んで行き飛び立った。

「私には何も無いのか！？」

……はあ。田頃の暴力が原因だと思つただがな、算。

空気を読め、そして察しろ

一夏のオルコットの試合は……まあ、予想通りの結果だつたな。オルコットの懐まで入り込んだまでは良かつたが、雪片の力を理解していなかつた事が原因で一夏の敗北になつた。

もし、一夏が雪片の特殊能力を理解していくの戦いだつたなら勝利していただろう。

……話は変わるが、目の前にあからさまに落ち込んでいる一夏が居るので。さすがの篠もどうすれば良いか分からぬようだ。私や山田先生をチラチラ見ている。

私も山田先生の方を見ると山田先生は何かを言わなければならぬと思つてゐるのか、口をパクパクさせている。

……私がなんとかしなければならないのか。

「……一夏」

名前を呼ぶとビクッと反応してから恐る恐る私の方を向く。

「はあ。初めてにしてはよくやつた方だぞ、お前は」

「えつーー？」

「相手は代表候補生なのだからお前が勝てないのは当たり前と言つて良い」

「うーー？」

「お前はエスの稼働時間が少ない。しかし、あれだけ動けたのだから、漫心しない程度に自信を持って」

「ち、千尋ねえ」

「えつと、エスは今待機状態ですが、織斑くんが呼び出せばすぐこ 展開できます」

「……山田先生。わざとやつてるのか？」

一夏の方を見ると、山田先生を睨み付けていた。

「ただし、規則があるのでこれをちゃんと読んでおいてくださいね」

『サッと』『エス起動におけるルールブック』を取り出した山田先生。

いつから持っていたのだ？あと、そんな絶望しきった表情をするな。

「まあ、なんだ。今日はこれでおしまいだ。帰つてゆるつと休め」

一夏が重い足取りで帰つていったのを確認したので山田先生の方を 向く。

「わい、山田先生」

「は、はいー？」

「アレは何の真似だ？」

一歩一歩と山田先生へと近づく。山田先生は逆に後退る。

「何故、あんなタイミングで割り込んできたのかを聞きたいな
わたしの更なる一歩に山田先生も一歩さがるつゝある。しかし、もう
壁際まで来ていてさがることが出来ないな。

王手だよ、山田先生。

「おおお弟思ひですねーー?」

「それで?」

「それでー?あーつヒー?えーつヒー?」

悪いが山田先生。

「時間切れだ」

私は右手をゆるつとあげて山田先生の頭を驚撃みこす。

「いたたたたーー!田覚めるー?田覚めちゃこますー?」

ピット内に知つてゐる人物の悲鳴が響き渡つたが私は気にしなかつた。何故なら私が原因だからだ。

姉として一夏が心配になるときがあるのだが

一年一組のクラス代表は一夏に決まった。当初は勝者であるセシリア・オルコットがクラス代表になる権利が与えられるはずであったが、辞退して一夏に譲った。『わたくしが相手でしたので一夏さんの敗北は仕方がないですわ。それにわたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして』と一応述べていたが、おそらく一夏に惚れたのであらう。あの目を見れば一発で気がつく。

一夏はオルコットの恋心によってクラス代表に就任したのだ。やりたくもないクラス代表を押し付けられた一夏にしてみれば迷惑な話だな。

それはさておき……。

「HSの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、オルコット。まずは飛んでみせり」

今は授業中だ。

「HSの展開は素早くやれ」

一夏とオルコットの2人を生徒達が見える場所に来させて、HSの展開をさせる。
さすが自慢するだけはあるな、オルコット。展開スピードは及第点だ。

一夏も少々遅いが気になるほどではない。

「飛べ」

ISを展開した2人に指示を出すと、オルコットはすぐさま急上昇して小さくなつた。

一夏も急上昇を開始したが、白式のスペックのわりには遅い。

「出力は白式の方が上だぞ」

私はインカムで一夏に言つ。

声の届かないほどに上昇しているからこのよつた物で指示を出す必要がある。

オルコットの感じからして、今頃上で一夏と会話を楽しんでゐる感じだ。なんせ、邪魔者が居ないからな。

「一夏……いつまでそんなとこでいる……早く降りてこ……！」

山田先生のインカムを奪つた、筈。

「はあ。教師のインカムを奪つた」

パン！！

筈の頭を出席簿で出来るだけ速く叩く。

「いっ！？」

それなりに速く叩けたな。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやれ。目標はそつだな、地表から10センチだ。出来るだけ目指せ」

私の言葉に小さい点が急激に面積を広げていき、途中からそれがエスを纏つた人だと認識出来るようになつた。

まずはオルコットか。

地表ギリギリまで急降下するとオルコットはピタリとその場に停止した。

山田先生が地表との距離を測る。

「ちょうど一〇センチですね」

生徒の出来映えが嬉しいのか声が弾んでいる山田先生。

「よし。オルコット、その場から退けろ」

さて、次は一夏か。一〇センチちょうどとは言わないがせめて一メートルくらいの場所で止まれよ。

空気を切り裂く音を響かせながら一夏が急降下してきた。その速さは弾丸を思わせる。

ズドオオン！！

訂正、爆撃か何かだな。グラウンドに穴が空いてしまつたからな。まったく、砂を被つてしまつた。

「この世界に嫌気でもさしたか？」

もしかしたら、一夏は膨大なストレスを溜め込んでいるのかも知れない。姉である私が気づけなかつたとは。すまない一夏。

「あーっと、無いです」

それは安心した。つまりは唯の失敗だな、これは。

「ならば六から上がつてこい」

一夏がクレーターから上がつてくる。

「情けないぞ、一夏。私が昨日教えてやつたださつ

腕を組んだ筈が一夏に向かつて言つ。

「大丈夫ですか、一夏さん？」

オルコットが筈を押し退けて一夏の前を陣取る。

お前達、今は授業中なのだが？

「HSを装備していく怪我などするわけないだろ？」

確かにそうだがな、筈。もう少しは一夏を心配する気持ちを表に出せ。この前一夏が剣道に通ずる者が無防備に対して平氣で木刀を振るうと私は報告してきたぞ。

「HSを装備していたとしても他人を氣遣うのは常識でしょ」

そのことに賛成だが、今は授業中だ、私語は慎め。常識だ。

「お前が言つた。この猫がぶりめ

「鬼の皮を被つているよつはマシですわ」

私の目の前で視線をぶつけ合ひ馬鹿2人。せっかくだから私の拳もぶつけてやううか？

チラリと山田先生の方を見ると、この面倒くさい事態をハラハラしながら見ていた。

……止めていただきたいのだが？

パン！パン！パン

「はあ。端っこでやれ馬鹿共。邪魔だ」

痛みに悶える筹を押し退ける。オルコットはエリのシールドバリアーのせいでダメージを与えられなかつた。

「織斑先生。どうして私も叩いたんですか？」

涙田の山田先生が問い合わせてくるが時間が無いので無視する。

「織斑、武装展開しろ」

「はい」

一夏は自身が集中しやすい姿勢で雪丘式型を呼び出した。

「ふむ、もう少し速く出せるよ！」

私の言葉に少々落ち込んで一夏を放つておいて、オルコットの

方を向く。

「オルコット、武装展開」

「はい」

さすがは代表候補、速いな。

「そんなとこに向けて、お前は一体何処に誰を撃つんだ？」

横に銃身を向けて出すな。

「！」、これはわたしのイ

「近接用の武装を出せ」

聞く耳持たん。

「……はい」

大いに不満あり、という顔しているが受け付けないぞ。時間が無いからな。

オルコットは近接用の武装を出そうとするのだが、なかなかイメージがまとまらないのだろう。初心者用のやり方で武装を呼び出した。

「何秒かかっている。実戦は待った無しだぞ」

「じ、実戦では近接の間合には入らせません。ですから問題ありません」

……馬鹿か？

「初心者相手に懐を許した者が言つ」とではないな」

時間を確認すると授業が終了の時間だった。

「篠ノ瀬、オルコット。授業中の私語、授業妨害をしたから、その穴を埋めておけ」

原因は一夏なんだが、こんな疲れる2人に理不尽な目にあわされて
いるから許す。

何度も叩いてやるぞ、馬鹿共へ

「今日から一年一組の担当になる十六夜 時雨です。よろしく、織斑千冬先生」

私の目の前に一般に一枚目、つまりイケメンと分類される男がいた。年の頃は20代前半。端整な顔立ちで髪は輝かしい金色。瞳は本来人ではあり得ないオッドアイで左が赤で右が青。身長は180以上はある。モデルみたいだ。

……はつきりと言える。気持ちが悪いと。

私の思つていることなど欠片も知らない男は笑顔で山田先生に挨拶している。

……そもそも君は誰だ？

十六夜が周りの人間に挨拶をして回る間に私は近くにいる同僚から話を聞く。

曰く、2人目の男性でI.Sが使えるらしい。

曰く、政府が無理矢理入れてきたらしい。

曰く、篠ノ之博士から直接I.Sをもらつたらしい。

あと、「美形で私の好み」らしい。……知るか。

ずいぶんと唐突に来たのだな。

此方に戻つてくる十六夜を眺めながら私は内心ため息をつく。

「行きましょうか。織斑先生、山田先生」

二口りと笑いかけてくる十六夜に私は何も言わずに一年一組へと向かうこととした。

「いやあ、美人2人と一緒に仕事が出来るなんてラッキーですね」

わざわざ社交辞令ご苦労。

「び、美人だなんて！？織斑先生の方が綺麗ですよーー！」
「どうだか

相手の言葉を真に受けていちいち大変だな、山田先生。はあ。教務室のすぐ隣に一年一組があれば良いな、と初めて思つてしまつた。

この十六夜と言う男は色々な質問を投げ掛けてくる。

兄弟は？好きな物は？趣味は？好きな男性のタイプは？…………職務質問か何かか？

一年一組の教室にたどり着くと入口を陣取つてわめき散らす馬鹿者が居た。

見た」とあるな。……まあ良二。

「
退け
」

「なにか…？」

此方に視線を移すことなく怒鳴る馬鹿者に私も実力行使にでる」と
を1秒以内に決めた。

スッと右腕をあげる。もちろん、出席簿を装備して。
虫の居所が悪いので今は手加減などせず、力の限り振りおろす！！

バーン！！

「あがー！？」

酷い声だな。

「ＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

私の顔を見た馬鹿者は酷くびっくりしていた。

……思い出した。凰鈴音だ、この小さいのは。

「織斑先生と呼べ。すぐに教室に戻れ。あと道を塞ぐな。此処はお
前の物じゃない」

すぐさま入口から退いた鈴音。

「またあとで来るから逃げないでよ、一夏……」

「他のクラスはＳＨＲ中だから音量を下げる」

私の言葉が届いたかは知らないが鈴音は猛スピードで一組へと逃げ

ていった。

まあ良い、やつと教室に入れるな。

「一夏、今のは誰だ！？」

「一夏さん、あの子とはどういつ関係で！？」

馬鹿2人を皮切りに教室内が騒々しくなった。

アレか？全員で私を怒らせたいのか？

バーン！バーン！

とりあえず一夏の元へと詰め寄る雛とオルゴットを叩く。

「席に着け、いい加減叩くぞ」

もう2人を叩いたのだが、見せしめなので指摘したら更に2人を叩くぞ。

意識が飛ぶまで叩いてやりたい

……今日はもう疲れたな。

教科書を読みながら私は思う。

教室の端で山田先生と一緒に私の授業を聴いている十六夜先生の登場が原因でS H Rは騒がしいものになってしまった。

I S 学園は女子校なので異性が珍しいのは分かる。だからといって質問攻めにして時間を無駄に浪費されるのは困る。十六夜先生も嬉しいように質問に答えていくから手に負えない事態になってしまった。あまりに面倒な事態に軽くフラッとしてしまった。

山田先生がそんな私に気がついて支えてくれたから、床に倒れ伏すことはなかつたが。

……改めて感謝する、山田先生。

騒動が治まつて授業を始めることができた。

授業中静かなのが嬉しい。

一夏をチラツと見ると、眞面目にノートを取つていた。実に喜ばしい事態だ。たぶん昨日失敗がそうさせているのだろう。

……それに比べてお前は何もしていないな、篠。

ノートを開いているだけで何も書かれていないし、シャーペンを持つ手は全く動いていない。眉間にシワを寄せて何かを考えているようだな。大方先ほどの事だらう。

しばらく篠の席の近くで止まつてみると、目を閉じているから全然気づいていないな。

考えがまとまつたのか急に腕を組んで上機嫌な表情になつた。

気持ちが悪いのだが。あと、クラスの視線を悪い意味で集めているぞ。一夏も恐ろしいモノでも見るような顔をしているのだが。

「……篠ノ之、答えは？」

問題など出していないが。

「は、はい！？」

何処に行つていたかは知らないがお帰り。

「答えは？」

再度問い合わせる。問題が存在しないから答えも存在しないが。

「あ、聞いていませんでした」

正直だな、褒美をやうつ。

バーン！！

「聞けよ」

最早、語るまい。

授業再開で私は再び教室を周りながら教科書を読み説いていく。

が、しかし、馬鹿者がもう1人居ることに気がついた。自称エリー
トのセシリ亞・オルコット。

一見ノートをちゃんとノートを取つてゐるよう見えるが、手の動き
を見るとおかしい。一本線を引いているのかノートの端から端へ
と動いたり、円を描くようにぐるぐる動かしたりと。

オルコット……お前もか。

「はあ」

ため息が出てしまつ。

オルコットの近くへと向かう。

急に進行方向と逆に歩き始めた私にクラスのほぼ全員が気がついて
ノートを取る手を止めた。

オルコットの席についたが当人は全然気がついていない。

とりあえずオルコットのノートを見てみると……線と円が大量に書
かれていた。

「……オルコット」

呼び掛けて見る。反応が無ければ叩くぞ。

「……例えば『データに誘つとか』」

……オルコット、教科書にそのような事は書かれていないのだが。

「いえ、もつと効果的な」

……効果的な目覚めをプレゼントしよう。

バーン！バーン！！

それも2発だ。

阻止限界点を突破しそうだ

「美味しそうですね」

ガヤガヤと賑わっている学食内で山田先生が私の食べている口替わりランチを物欲しそうな目で見ていた。

「人が食べるものって美味しそうに見えるからな」

山田先生を軽くあしらいながら箸をゆるりと進めていく。

それにしても午前の授業は疲れた。

何に疲れたかと言えば、箸とオルコットが原因だ。時折ボーッと考え事をしていたり、急にニヤリと笑つたりして気色が悪かった。クラス中がたまに箸とオルコットをチラチラ見ていて、集中も何も無かつたのだ。

「千冬さん、真耶ちゃん、相席良いですか？」

質問しながら勝手に私の向かい側に座る不屈き者が居た。
質問したなら、返事を返すまで待つのが常識じやないのか、十六夜先生？あと、気安く下の名前を呼ぶな。

「いやいや、お疲れ様です」

とても良い笑顔で私達に労いの言葉を投げ掛ける十六夜に私は少々イラついた。

「そちらも初日から」苦労様

視線を彼に向けるのも億劫だ。

「お疲れ様です十六夜先生。……あの、私の名前を……」

山田先生がおずおずと何かを十六夜に言おうとする。

「ん？ 真耶ちゃんで良いんですね？ 自己紹介の時に書きましたから。あーっと今は食事時なので先生をつけるは勘弁してください、千冬さん」

残念ながら今この時も私達は教師なのがね。それに山田先生が言いたい事はそんな事ではない。おそらく山田先生が言いたい事は私が言わんとしている事と同じだろ？。

「十六夜先生」

箸を置いて十六夜を睨みつける。

「いやいや、気軽に時雨って呼んでくださいよ、千冬さん」

わざとらじけ手を振る十六夜に私は出席簿でしこたま叩きたい気分になつたと言つておけり。

「残念ながら私達が食事をしているの時間も教師として務める必要がある。そのような軽い態度で接してくるのは非常に不愉快だ。君はこのHIS学園において誰よりも新人であるのだから、最低限の礼儀をわきまえるべきではないのか？」

私の言葉にへりへり笑つてゐる十六夜は止まつてしまつた。

しかし、すぐに再起動してしまつ。

「千冬さん、肩の力を抜きましょうよ。リラックスリラックス。そう思いますよね、真耶ちゃん。同僚なんですから、壁なんか作らないでフレンドリーいきましょ！」

反省の色無し。

はあ。そろそろ我慢の限界だ。

「そんな怖い顔しないでくださいよ、千冬さん。せっかく綺麗な顔してるんですから笑顔でいてください……あがつ！？」

べたべたしたような気持ちの悪い言葉を吐き出す十六夜のこめかみに凄い勢いで何かが激突した……2発も。

音をたてて床に落ちるのは一対の箸。

飛んで来た方向に田を向けると、顔を逸らす一夏が居た。

助けてくれたのは嬉しいが箸を投げるなよ。

落ひ着け！－それは塩だぞ！－？（前書き）

飛ばして行きます。ペースではありませんよ。

落ち着け！！それは塩だぞ！？

気がつけばクラス対抗戦になっていた。

時が経つのは早いな。

私は山田先生、十六夜、オルコット、篠と共に試合を観戦していた。一組の一夏と一組の鈴音がアリーナで激しく動き回りながらぶつかりあっていた。

オルコットと篠はハラハラしながら試合を眺めている。山田先生もおそらく同じ思いで眺めているだろう。

十六夜は今が今かと何かを待っている雰囲気だ。何を待っているかは知らないが。

……「一ヒーを飲んでいる私には関わり合いの無い事だが。
「一ヒー片手に一夏の試合を観てている私はどうなんだろうな？
まあ、勝っても負けても構わないから、こんな不真面目な観戦が出来るのはどう。

「衝撃砲ですね」

モニターで試合を観戦している篠の咳きにオルコットが答えている。

離れば衝撃砲。近づけば青龍刀の餌食になる状態で一夏がどれの行動はイグニッショングーストによる奇襲位だな。しかもチャンスは一度だけ。幸いにも雪片式型の力があるから可能なやり方。それがなければ、負けるだけだろう。

ぼーっとしながらそう考えていると、一夏は私の考えた通りの行動を選択した。しかし、鈴音に必殺の一は届かなかつた。

突然の衝撃と共にアリーナに侵入者が現れたからだ。

……とつあくべす パーヒー おかわり。

私が異常事態にも関わらずコーヒータイムを堪能していると山田先生が一夏達に退避するように呼び掛けていた。

「繙くん麗してます!? 嘉ちゃんも!! 麗してます!!」

焦つて いるな 山田先生。

「落ち着け山田先生。本人達がやると書いているならやられせてみて
も良いだろ?」

顔を赤くした山田先生が必死に叫ぶ。

「どうあんず」マークーでも飲んであることとする」とだ

私は2つの容器を取り出して山田先生に見せる。片方には「塩」、もう片方には「砂糖」と書かれている。

「どっちを入れる？」

「砂糖に決まってますよー！」

そう言ひて塩の容器に手を伸ばす山田先生。
私は「コーヒーに塩をぶらりんで山田先生に渡す。

「君はチャレンジャーだな」

まさか塩を選ぶなんて。

「あの……塩ですね、それ?私が選んだのは砂糖ですけど」

「いや、まっすぐ塩に手を伸ばしていたが。落ち着けば間違わなかつたのにな。まあ、落ち着きのない自身を恨みながら飲むと良い」

山田先生がコーヒーを飲むのを確認すると、私もコーヒーに口をつける。

山田先生の絶叫が響き渡り、私は今が非常事態なのだと思いました。

この一杯を飲み終わる前に事態が收拾すること願うばかりだ。

まあ、主役が誰か教えてやるよーー。 by 十六夜（前書き）

ビーム砲……まあ、シンプル過ぎて。とりあえず、ガンダムで言つ
ならG バードでしたっけ？それを想像してください。

さあ、主役が誰か教えてやるよー！　ｂｙ　十六夜

アリーナのシールドを破り侵入してきたＩＳに俺は自らの力をこのアリーナ中見せつける時がきたのだと感じた。

すぐに行動する。今すぐ舞台上に上がらなきゃならないから。アリーナ内に入るために、ＩＳを展開する。

見た目は一夏の白式と同じ形のＩＳだが、色合いは真逆の黒。右手にビーム砲を持ったこのＩＳの名前は『黒印』。束が俺の為だけに造りあげたＩＳ。

さてさて、鈴を救いに行きますか。一夏はそこらで飛んでいろいろって言いたいが千冬さんのフラグに必要だから助けてます。だが、助けるだけ。お前のハーレムは俺の者。ジャイアンは素晴らしい名言をのこしてくれた。

アリーナの遮断シールドに向けてビーム砲『黒龍』を放つ。

高出力のビームがシールドを破壊したので、アリーナへと踊り出る。

人形が俺の存在に気づいてビームを放つ。

ちんけなビームだな。

回避して黒龍の砲身を人形に向ける。

「パワーがダンチなんだよー！」

人形よりもデカイ閃光が人形の右腕を跡形もなく消し飛ばす。命中した衝撃にバランスを崩した人形。

俺は続けざまに黒龍を発射して人形を撃墜する。

一 夏と鈴は俺の強さに田を見開いている。

「怪我はないよな?」

主に鈴に向けて声をかける。

緊張を解いた2人。

だけど、まだ活動出来る人形が一夏に向けてビームを撃とうとする。

もちろん俺はわざと見逃す。千冬さんフラグをたてるために。
一夏が撃墜されて落ち込む千冬さんに俺が優しく声をかける。そこ
を皮切りに段々俺に甘えてくるようになる千冬ちゃん。……すげえ良
い!!

一夏がビームで落ちたあとに俺は黒龍で人形を破壊して終了。

一夏は保健室に運ばれ、俺の前には千冬さんが。コーヒーを俺に渡
してくれる。

ヤバいな、すでに俺にメロメロー?

嬉しくなつてコーヒーをガバッと飲んで……俺は絶叫した。

……しようとする!?

ショッパンに悶える俺に千冬さんは色々怒鳴りつけてきた。

……何故だよ!?

場の空氣を察したなら出てこつてくれ（前書き）

頭は痛いし眠い。つまりは寝不足。だから内容も……。
言い訳にしかなりませんね。
では、どーぞ。

場の空気を察したなら出ていってくれ

保健室に入るとまず目に入ったのは、何故この場に居るか分からぬ十六夜とその十六夜を睨みつけている一夏。

ふむ、一夏は大丈夫だな。

面倒だから十六夜が居ない定で一夏の元に行く。

見た目にも怪我は無しだな。

「大丈夫か？」

一応の確認をする。目に見えない怪我や取り返しのつかない後遺症が無いとは限らないからな。

「たぶん大丈夫だと思つ」

顔だけを私の方に向けた一夏が言つ。

一夏の答えを聞いてひとまず安心した。

私は医学の知識など持ち合わせていないので、本職の判断を聞くまでは油断出来ないが。

「一夏くんは無事みたいですよ、千冬さん。いやー、まさかあんなになつても動ける工事だなんて。まあ、結果良ければ全て良し！…」

馬鹿が一人で盛り上がりしているのだが。

あれほど、説教したのに反省の色がまるで無いな。

「一夏、無事で良かった」

一夏の頬を優しく撫でる。
命を落とす危険な状態でも冷静さを保ちながら対処出来たことを私は誇りに思う。

同時に叱りつけたい気持ちも少なからずある。今回は言わないでおく。

一夏の頬から感じられる体温が安心させてくれる。

「家族に死なれたら寝覚めが悪い」

私の言葉にぱつが悪そうな顔する一夏。

……言葉の選択を誤ったのか私は。

「千冬姉」

「なんだ?」

「心配かけてごめん」

負い目を感じさせてしまったか。本来心配をかけているのは私だと言ひのこ。

「気にするな。お前が私より先に死ぬはずが無いからな」

謎の理論だが姉として私より先に一夏を死なせるような事はない。

「まあ、一夏くんは頑張つて強くなりなよ。その間は俺がみんなを守つてあげますから」

「バシン！！

笑顔で怪我人の肩を叩く十六夜。

肩を叩かれた一夏は痛みに悶えている。

「バーン！！

だから私は十六夜の頭を力の限り叩く。

「お前は常識の欠片も持ち合わせていないのか？怪我人を叩くなどして」

もはや害虫でしかない十六夜を私は全力で保健室から追い出して扉に鍵をかける。

「大丈夫か、一夏？」

一夏の頭を撫でて痛みを和らげる。痛みが和らぐかは分からぬが何もしないよりは良いだろう。

「もう少し休め、一夏。眠るまでは居てやる」

久し振りの姉弟だけの空間が私に安らぎを与えてくれる。一夏も同じ思いなのか、私に頭を撫でられながら眠りだした。

「ゆるりと眠れ」

止めろーー私達はもう限界だーー（前書き）

あれ？キャラが変わってきた？

それとも十六夜がウザくなつただけ？

止めろ!! 私達はもう限界だ!!

今日も変わらず教務室から一年一組の教室に向かう。何時もと変わらないルートだが、面子が違う。正確に言えば面子が違うのではなく増員したと言えば良いのかな?

山田先生に十六夜が居るのは最近では当たり前になつてしまつたが、今はそこに金色と銀色の転校生が混ざつている。

金色の方はフランスから来たシャルル・デュノア。男としては身長が些か低い。第三の男性でISが使えるらしい。

それは今どうでも良い。問題は銀色の方だ。

「お久し振りです、教官」

ビシッとした姿勢で私に挨拶をしてくるのは、ラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツから来た軍人。

「久し振りだな、ボーデヴィッヒ」

SHRの時間があるから簡素な挨拶だけですませる。すぐさま一年一組まで向かう。十六夜が来る前はゆるりと教室に向かうのが少ない安らぎだった。

あの日々が懐かしい。

教室に着くと、山田先生と十六夜を先に入室させて、私は2人に呼んだら教室に入るように言つ。

「分かりました」

「了解しました」

爽やかな笑顔で返事をするデュノアとビシッとして返事をするボーデヴィッシュ。

果てしなく面倒になりそうだな。

そもそも、他所にまわしてほしいのだが。此方はオルコット、篇、一夏の3人で精一杯だ。これ以上負担を増やすな。

……ブリュンヒルデの称号が原因か? だとするならば、歴代のブリュンヒルデをエジ学園で雇え。

「はあ。諸君おはよ~」

ため息と仲良く教室に入る。

朝からため息とは。

教室に入れば高速で自分の席に着席する生徒達。

教壇に立つと一番に目に映つたのは嬉しそうにしている一夏。

そういえば、わざわざ夏用のスーツを持ってきてくれたな。

「山田先生、ホームルームを」

山田先生と場所を代わる。

「聞いて驚かつて奴ですよ、皆さん」

山田先生に任せたのに何故にでしゃばる、十六夜。

山田先生が凄い目付きで見てるぞ。あの山田先生が。

「今日はなんと転校生を紹介しますね。しかも2人」

山田先生が私の方にやって来た。
不満な顔をしているな。

色々振り回されている山田先生だが、仕事に誇りを持つているのだ
うづ。

私は山田先生の頭を軽く撫でる。
そして同時に出席簿を構える。

「お願いします、織斑先生」

「心得た」

小声でのやり取りのあと、わたしは振り上げた出席簿を馬鹿に振り
おろした。

やひかしたな、ラウラ？

「改めて、今日はなんと転校生を紹介しますーーしかしも2名です」
山田先生が嬉しそうに語る内容に生徒達は無反応だった。まるでその内容を知っていたかの如く。

わざわざ馬鹿が上機嫌で喋っていたからな。この無反応加減も当然だ。

「入つてこい」

わざわざ反応してくるまで待つなんて時間の無駄だ。
教室のドアが開き、金色と銀色が入ってきた。

先ほどの反応の無さが嘘のよつに食いついて転校生を見つめ始めた生徒達。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

当たり障りのない自己紹介だな。まあ、当たり前か。女子は群れのから仲間ハズレになると面倒だから。……デュノアは男だから関係無いか。

「お、男？」

誰かが呟いた。別に誰でもかまわぬが。
確かに自己申告されなければ男には見えないな。男装した女にしか見えない。しかし、世の中は男みたいな女や女みたいな男がいるの

だから良いだろ？。

「モルガナ」

h
?

1人が騒ぐと周りに感染してより騒がしくなる。

「男子！！しかも3人目」

2人の間違う。1人は馬鹿者なのだから。

「しかもうちのクラス」

此方としては許容量限界で他に行つてほしかつた。

「美形！！守ってあけたくなる系の！！」

何系でも良いんだから、

「地球に生まれて家が二つだーー！」

地球以外に生物がいたとは聞いたことがないぞ、私は。私が知らないだけかも知れないが。

「騒ぐな。静かにしろ」

とりあえず五月蠅い。今はH.R中だ。

「みなさん静かに。まだ自己紹介が終わってませんか?」

「私は続くよつに山田先生が注意する。

次の自己紹介はラウラなのだが。我関せずとも言いたいのか、腕を組んで黙りを決め込んでいた。視線だけが私の方を向いている。

「はあ。挨拶しろ、ボーデヴィッヒ」

「はい、教官」

……言い忘れていたな。

「ここでは織斑先生と呼べ。もはや私は教官ではないし、お前は一般生徒として扱われるのだから」

「了解しました、教官」

話を聞いていたのか?

「バーン!!」

「織斑先生だ」

聞いて覚えられないなら、体で覚える。

「りょ、了解しました、織斑先生」

分かればそれで良い。

「ラウラ・ボーテヴィッチだ」

……はあ。まあ、想像していたよりはマシだな。

「あの……以上ですか？」

さすがに薄っぺらな内容に山田先生が確認する。

「以上だ」

泣きそうな顔するな山田先生。挨拶しないよりはマシだな。

私が心の中で山田先生を慰めているとラウラが一夏の方へと歩を進めていた。

「貴様が！！」

初めてクラス中が聞いたであろう感情のこもった声を出した。

バシン！！

いきなりの平手打ち。

あまりにいきなりの仕打ちに一夏はきょとんとしている。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

ラウラ、お前が認めなくても私と一夏は姉弟なのだが。
それよりも。

「あの人とは誰だ？」

私の事だというのは分かる。

「 もちろん、教官の事でし」

ビシッとして答えるラウラに私は笑う。

私の仕掛けた罠にかかつたな、馬鹿者が。

バーン!!

「先ほど言ったかも知れないが、織斑先生だ」

くだらない理由で一夏に手をあげるな。

口は禍のもとと言つだり？いい加減に学べ

……足りない。

第一グラウンドで私は思つ。

朝食が足りなかつたという訳ではない。
単に人数が2人ほど足りないだけだ。

今日は一組二組合同の実戦訓練をやるのだが……教師が私と十六夜
しか居ないのは何故だ？そもそも十六夜は教師なのか？

辺りを見渡しても一一組の生徒達と十六夜以外に人影がない。

後に山田先生が来るのだとしても明らかに人手不足。普通の授業な
らともかく、実戦訓練は場合によつては怪我人が出てしまう。危険
性が少しでもある授業に3人はやはり少ない。

……ISにはシールドバリアーがあり、今回の授業は起動してもら
うだけで良いので3人いればなんとかなる。しかし、朝から精神的
に疲れている私の主觀では3人では足りない。
だから2人ほど増員してほしい。

ついでに一夏とデュノアがまだ来ていない。

腕を組んで目を閉じる。

「遅い」

ボソッと呟く。

「すいません……」

……あれ？

声のした方を向くとすでに一夏とテュノアが居た。

気づかなかつた。何時来たんだ？

「謝罪はいいから列に並べ」

内心の驚きを悟らせないために私は視線を列に向けながら言ひ。

一夏達が列に入り、やつと授業が始まられる。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

オルコットが一夏に対して話しかけていた。

授業が始まる前から授業妨害か、オルコット？

「スースを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

オルコット、お前はどうして私を困らせるように私語を始めるのだ？

「道が混んでいたんだよ」

一夏も返答するな。ちなみにあと一回私語をしたら出席簿だぞ。

「ウソおつしゃい。いつも聞に合ひへせん」

「いつも五円蠅いな、オルコット。お前は出席簿一発確定だ。

「ええ、ええ。一夏わんぱかし女性の方との縁が多こよつですかから？」

確かに多いが面倒くさがる奴ばかりだよ。

「せうでもない」と二円続けて女性からはたかれたりしませんよね

出席簿四発だ。

「なに? アンタまたなんかやつたの?」

鈴音、お前もか。

私はゆるつと騒音の元へと向かつ。右手に出席簿を携えて。

「一夏の一夏さそ、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあー? 一夏、アンタなんでそつ馬鹿なのー?」

色々言われている一夏は私が向かつてきているのに気がついているのか、反論もせずに私を見ている。まるで救いが来たみたいな顔をしている。

「お前等はじつじて馬鹿なんだ? 特にオルコット、お前は何度目だ?」

相手が振り向く前に出席簿を振るひ。

バーン！バーン！バーン！バーン！バーン！バーン！バーン！

今時の出席簿は頑丈な作りになつてゐるな。

受けろ、我が弟の一撃！！

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

青空の下、よりやく授業を始められる事に私は嬉しく思つ。

一組と二組が揃つてるので返事に気合いが入つていて実に良い。

「何かとこつとすぐにポンポンと人の頭を」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい」

全部自分達のせいだろうが。なんでも人のせいにするなよ。一度くらいいなら私も注意だけで済ますが、何度も馬鹿みたいに繰り返す者に容赦は出来ない。

「凰、前の生徒を蹴るな」

一夏を蹴るな。気づかれていないと思つてはいるようだが、此処から全部見えてるぞ。

天網かいかい疎にして漏らさず、といつ奴だな……確か。

「問題児2人に戦闘の実演をしてもらおう。凰、オルコット」

明らかに嫌そうな顔をするな、鈴音、オルコット。迷惑かけた分だけ償え。

「ちょっとーーなんで私も問題児扱いにーー！」

自覚が無いのが悲しいな。

「いいから前に出る」

嫌々前に出る2人。

あまり使いたくない手段だが仕方ない。

「やる気をだせ。アイツにお前達の強さを見せて気をひくチャンスだぞ」

小声で燃料を投下する。ここで一夏でなくアイツと言つのは私が一夏をダシにするのを良いとは思えないから。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！！」

「まあ、専用機持ちの実力の違いを見せる良い機会よね！…専用機持ちの！…」

……単純で助かる。

「それで、相手はどういうに？」

その言葉を聞いて、一步前に出る奴が1人。

十六夜時雨！！

だけど無視する。はつきり言つて時間の無駄だから。

私が馬鹿者を無視していると空気を裂く音が聞こえ、近づいてくる。

「あああー？ 退いてくださいーーー！」

ガシツ
!!

ISを装着して何故か突撃してきた山田先生を十六夜が自身のISを展開して抱き抱えていた。俗に言うお姫様抱っこだな。

「危なかつたですね、真耶先生！」

笑顔で山田先生に語りかける十六夜に対して、山田先生は顔を赤くしている。

「おれってやだな……」

「分かりました」

十六夜が山田先生をおろすと、山田先生はすぐさま此方まで走つてきた。……エスなら飛べよ。

「ななななんなんですかー？気持ち悪いですよ氣味が悪いですよ氣
色悪いですよー？」

凄いな、小声で叫んでる。

「気持ちは分かるが落ち着け、山田先生」

山田先生の肩を掴んで落ち着かせる。

「良いか？良く聞け山田先生。君は今から凰、オルコットと一対一で戦つてもらひ」

「今は無理です！！」

「君は元代表候補生だ。あんなひよつゝ共軽く捻れる。鬱憤晴らしに倒してこい。それなら先ほどの不快な感触を紛らわせる」

山田先生を復活させるために私は山田先生の目を見て必死に話す。良し、良いな。大丈夫だな。

「凰、オルコット。相手は山田先生だ。存分にやれ」

「一対一で？」

「いや、さすがにそれは」

専用機で一対一なら勝負にもならないと言いたげだな。

「お前達が負けるから気にせずにやれ」

私の言葉が気に障ったのか口を開けて武器を構える。

「頑張つてこい、山田先生」

いつもと違う冷静で鋭い雰囲気を醸し出す山田先生が空へと舞い上がる。

悪いが凰、オルコット。山田先生の気晴らし付き合つてやれ。

結果は圧倒的な差をつけて山田先生が勝つた。気晴らしなつたらしく、とても良い笑顔で此方に戻ってきた。

「さて、これで諸君にもエコ学園教員の実力は理解できただろう。それに専用機だから必ずしも強い訳ではないと。以後は敬意を持つようだ」

尊敬の眼差しで山田先生を見ている生徒達に一応言つておぐ。

「専用機を持つ8人を各々リーダーとして8グループを作れ。実習を行う。では、分かれろ」

言つた瞬間に後悔した。

皆一夏とトコノアに集中して集まつたからだ。

「はあ。出席番号順に並んでグループを作れ……」

バババッと音に出来るくらいの速さでグループが完成する。

最初からそのくらいの速さでやれよ。

とりあえず、あとは山田先生に任せる。

「千冬先生、俺も生徒達に教えにいきますよ。初歩の初歩で生徒同士でやることしてもまず先生が手本を見せるべきですよ」

私の肩に手を置いて語りかけてくる、十六夜。

……セクハラで訴えれば山田先生の件も入れて勝てるな。

「これは生徒同士でやることに意味がある」
「いやいや、それでも……。ああ、そうですね。千冬先生が言わん

としている事が分かりました。まったく、照れずに正直に言つてくれれば良いのに。大丈夫ですよ。俺はみんなの俺ですから。ちゃんと見ていますよ」

……何か阿呆みたいな勘違いをしていないか?
あまりにあきれで何も言えないな。

ドオオオンー!

十六夜に背を向けて離れると後ろで凄い衝撃音が響く。

ゆるりと後ろに振り向くと尻餅をついた十六夜がいた。彼が先ほどまで立っていた場所には雪片式型が半分ほど埋まる形で突き刺さっていた。

一夏の方を見るがまるで何事もなかつたように女子生徒達に工事の起動を教えていた。

一夏の近くにいた女子達がひきつった顔をしているが。

頼むからくだらない理由で殺人犯にならないでほしい。

疲れたなら休憩しよう、話が分かる同僚と（前書き）

迷子ですよ。超迷子ですよ。

疲れたなら休憩しよう、話が分かる同僚と

今日は土曜日……？ 土曜日か土曜日なのか？

あまりにイラついているから正常な判断が出来ていないう。由々しき事態だ。

目の前には山積みになつた紙紙紙。私のデスクのほとんどを陣取り、自由なスペースがあまりに無い。

IS学園のデスクが一般のそれより大きい作りになつていてもだ。

この終わりの見えない書類群の原因は私の左隣にあるデスクの主。それ以外にも原因はあるのだが。

「まだ生きてますか、織斑先生？」

この事態を心配した同僚が声をかけてくる。生死確認のために。

「生きてはいます。ええ、生きては」

ただ手はもう死んでいる。

頑張つて書類を処理してはいるが、減つてる気がしない。……いや、たぶん減つてはいる。ただ、頭が一枚一枚処理するのに手一杯で他を認識出来ていない。

「十六夜先生は何をやつてはいるんですかね？自分の仕事をしないで

同僚が私の左隣にある綺麗なデスクを一瞥してから言へ。

同時に私のデスクの空いたスペースにコーヒーを置いてくれる。

「ありがとうございます」

礼を言つて「一ヒー」に口をつける。

口の中に広がる苦味が私の脳を無理矢理再起動をする。

「第一印象は良かったのに。幻滅しちゃったわー。仕事をしないなんてやる気あるのかしら?」

知りません。やる気がないなら追つ払つて新しい人を入れてほしい。十六夜よりは役に立つだろうから。

「あれでHISを起動できるものだから質が悪いわ。調子に乗つているのかしら」

「だとしたら教師失格だな」

手を止めて「一ヒータイム」にする。

ああ、すぐに寝たい。

目を閉じてしばし休憩。

「おわりいいる?」

「お願ひします」

今は一段と優しさが心にしみる。涙が出そうだ。

「休憩の途中失礼します、織斑先生」

声がしたので目を開けると先ほどとは違う同僚の先生が居た。

嫌な予感がする。

「先ほどそちらの受け持つ生徒達がアリーナではしゃいで居たので、一応報告です」

「誰だ？」

面倒事がやつてきたな。

「確か……専用機持ちの転校生2人と弟さんです。注意はしましたが、1人には無視されました。ああ、それから、お荷物さんが止めにも入らず眺めてました」

「あの馬鹿」

報告を聞いて机に突っ伏してしまった。額を勢い良くぶつけてしまつたが痛みが感じられない。

「あのお荷物は遊び呆けて、挙げ句に問題発生に何もしないなんて！…」

いつの間にか戻つてきていた同僚が声をあらげて批難する。批難しながらも私のデスクにコーヒーを置いてくれるからありがたい。

ちなみにお荷物＝十六夜だ。役に立たなすぎで仕事は十六夜にまわつてこない。周りがまわさない。報告書も真面目に書いていないから、すぐさま戦力外通知が渡された。本人は全く気づいてないが。

「なんでいまだに存在するのかしら、石狩先生？」

「日本政府が五月蠅いからでしょう。それに篠ノ之博士が工部を造つたのも関係するのでしょうか、かたりな語奈先生」

「背景が面倒だから現場の意見など切り捨てられるしな

体を起こして会話に参加する。

「語奈先生、『一ヒーあつがとうござります』

「どういたしまして」

「少し休憩がてら、色々話しますか？」

しばらく書類は見たくないからちょいと良いな。

「賛成だ。私も少々ゆるりとしたい」

有意義な時間を過ごせると私は笑った。

「それは反則笑顔ですよ」

「同性なのにドキッときます」

……幻聴が聴こえる！？

一度で諦めりよ、迷惑だ

ある日、HS学園の廊下で私はヘッドハンティングを受けた。曰く、外国で教官をしてほしいのだと。

「なぜこんなところで教師など……」

実は以前から話を持ちかけられている。その度に断っているのだが、しつこく誘つてくるのでいい加減うきつたく感じる。

「何度も言つが私には私なりに此処にいる理由があるんだ。諦めろ、ラウラ」

そして今すぐ教室に戻れ。

「このような極東の地にいるような理由とは何ですか……」

声を荒げて私に問いかけてくるのはラウラ・ボーデヴィッヒ。

「お願いです、教官。我がドイツで再び」指導を」

先ほどから教官教官と。此処では先生と呼べと言つたはずだが？

「此処では貴女の能力は半分も生かされません」

何故半分も生かされないと断言できる。私が手を抜いていると言いたいのか？

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではあります

ん

それを決めるのはお前ではなく私達教師の役だ。軽々しく口出しをするな。

「何故だ？」

ところで、誰かが盗み聞きしているな。曲がり角の先から聞こえていた足音が先ほどから聞こえていない。引き返す足音もないから止まって会話を聞いてこらるだらう。

「意識が甘く、危機感に疎く、ETSをファッショングなにかと勘違 いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれ るなどあつてはなりません！」

「はあ。良く喋る。べたべたとまるで自分の言い分が正しいみたい に。高々15しか生きてないのに、ずいぶんと偉くなつたな」

目の前にいるラウラを私は睨みつける。

私が此処でやつてきたこと否定された気分だ。表面だけしか見ていない知つたかぶり」ときに。

蛇に睨まれた蛙とはこの事か。……勉強になつたな。
それにこれだけですくむような熱意なら止めるんだな。時間の無駄だ。

「わ、私は」

ラウラの声が震えている。私の言い方や視線に恐怖しているのだろう

う。

相手に恐怖を「うるほど」に私は自制がきかない状態にあるらしい。
原因は…… もはや語るまじ。

「授業が始まるな。 皆まで言わず教室に戻れ」

出来るだけ平静を装つた声で「ううう」との場から消えぬ」と求める。
私の切なる願いが叶つたのか、怯えが貼りついていた顔を無理矢理
無に戻して足早に去つていった。

「出てこい、織斑。 盗み聞きなどしてないで」

私の言葉に曲がり角から一夏が出てきた。顔は怒られるんじゃない
かとビクビクしている。

別に怒らないからそんな顔をするな。 少しだけ傷つく。

「注意はしないから教室に戻れよ」

一夏に近づき頭を軽く撫でる。

おお、みるみる赤くなつていくな。

「え、は？ はい？ じゃあ、教室にすぐ戻ります！ ……今すぐすぐさまで
戻ります！」

混乱した一夏はもの凄いニヤニヤした笑顔で廊下を爆走していくなく
なつた。

「……はあ」

何故に姉大好き人間になつたのだ。いや、嫌われるよりは良いのだが。

とりあえず、ゆるりと教室に向かおう。

騒動を起すのは私のクラスだな（前書き）

軽くですが語奈先生と石狩先生の容姿説明が。本当に軽くです。

騒動を起すのは私のクラスだな

今日の授業が終わり、今は放課後だ。

私は例によつて書類処理をしている。前よりは少ない数なので幾分かは気が楽だ。

「居ませんねー、お荷物さんは」

私のデスクにコーヒーを置いてくれる語奈先生。

肩口まで伸ばしたフワツとした髪に無害そうな笑顔の女性で生徒達に好かれている先生。

「空気汚染器みたいな奴など居ない方が良い」

居れば面倒事を起す奴など必要ない。

手を止めて持つてくれたコーヒーに口をつけた。

最近ブラックコーヒーが苦こと思わなくなってきたな。味に慣れすぎてしまった言ひことか。まだ苦味を感じていた頃が懐かしい。

「そういえば、今回の学年別トーナメントは異例のタッグマッチですね」

もはや話題を広げる気もない語奈先生は今度行われる学年別トーナメントに話を移した。

私としても馬鹿者の話を続けると負の感情でじりにかなう

なので助かる。

「前回のクラス対抗戦で工Sが乱入してきた事が焦らせているのだ
ろ?」「

「迷惑な話ですよ。普段処理する書類とは別にやらなきゃいけない
モノが出てきますし」

急遽決定したことだからな。迷惑すぎる。私のクラスには問題児が
集中しているから他の教師陣よりも忙しい。

2人で雑談しながらゆるりと時間を過ごす。

「おかわり要りますか?」

「ああ、このわずかな休みが何よりの楽しみだ。

気のせいか外が騒がしい。

語奈先生も気がついたようで教務室の扉に目を向ける。

「緊急事態です、織斑先生!..」

勢いよく入室してきたのは石狩先生。ショートヘアで鋭い目付き
をした女性ですぐさま私の方へと向かってくる。

「じ、じつ……たい……」

全力で走ってきたのか、石狩先生は肩で息をしている。おかげで何
を伝えたいのかが判明しない。

「落ち着け、石狩先生」

そうしなければ、何も分からぬからな。

「はあはあ……もう大丈夫です。それでは報告します。第三アリーナにて、ラウラ・ボーデヴィッヒ、凰鈴音、セシリ亞・オルコットが過剰な戦闘を行っています」

早速問題を起こすのかラウラ。

「語奈先生。申し訳ないがおかわりは帰つてきてから頂きます」

立ち上がりすぐに走り出す。

第三アリーナへたどり着くと人だかりが出来ていて邪魔になつてた。

「退け!!」

たつた一言発するだけでモーセのようになだれか割れて道を作る。

あの問題児共もこれくらい言ひことを聞けるなら苦労しないのだが。

観客席の方は人で溢れかえつていてるだろからピットに入る。
中でHS用のブレードを一本拝借してアリーナへと走る。

アリーナ内にはボロボロにされた鈴音とオルコット。一夏を狙うラ

ウラ。それを妨害する『テコノア』といつ専用機持ち達の不出来な舞台が形成されていた。

まったく、手のかかる事をしてくれるな。

騒動の中心へと向かう。

一夏の雪片式型とラウラのプラズマ手刀が幾度なくぶつかり合う中に身を踊らす。

横薙ぎに振るわれた手刀をブレードで防ぐ。

くー！やはり生身では衝撃が強いな。

「なー？ 教官ー！」

驚くラウラに構わず、瞬時に後方にへと振り向く。

目の前には迫りくる雪片式型。

振り向かざまに右の拳を雪片式型の腹に当てて刃を無理矢理逸らす。

「ち、千冬姉ー？」

ラウラ同様に驚く一夏。振りおろされた刃は私の体から十センチほど離れた場所に沈んでいた。

「あまり手を焼かせるなよ、ガキ共」

私の乱入に周りは睡然としている。ただ、一夏だけが私の右手を凝視していたが。

「模擬戦をやるのなら構わないがアリーナのバリアーを破壊するまでに発展させるのなら話は別だ。お前等の馬鹿騒ぎは学年別トーナメントで終わらせる。それまでは戦うことを禁ずる」

「教官がそう仰るなら」

素直にエラを解除するラウラ。そして此方を見ないままアリーナを出ていった。

「織斑、デュノア、お前達もだ」

ラウラの方へと向けていた視線を一夏の方へ向けると、視界一杯に一夏の顔が映り込んできた。

「いつの間にこんな近くに。……あまりに近いぞ、一夏。

「何やつてんだよ、千冬姉！？」

一夏に怒られて抱きしめられた。

……私が何をしたんだ？

「夏が2人を無視する」と云つて

「例えば、例えばだが。固い岩に力一杯に拳を突き出したらどうなるだろ？」「

「千冬姉、頼むから無茶しないでくれ」

殴つた手から出血するといつ結果になつた。

「織斑先生と呼べ」

保健室の中では一夏に注意した。

確かに無茶した私が悪いが。そもそも、ああでもしなければ止まらないだろ。周りの声など聞こえていなかつたみたいだしな。

自分の右手に視線を落とすと、包帯で過剰なくらいに巻かれていて指を動かせなくなつていた。

「……やつすぎだろ」

「いや、千冬姉が無茶しなつにするには足りないくらいだ

「織斑先生な」

私の主張はもはや一夏には届いてなさそうだ。
ところでだな、あそこのベッドで不貞腐れている2人を構つてやつたらどうだらう？

私はベッドの方をチラリと見た。

もの凄い不満な顔した鈴音とオルコットが横になっていた。

私でも分かるほどの構つてほしいオーラが出でているのだが……一夏、どうする？

「それにしても、怪我が酷すぎなくてよかつたぜ」

いや、この包帯グルグル巻きの何処が酷くないんだ？

「あのドイツ人……じばく」

私の記憶ではお前のブレードで怪我した氣がするのだが。

「別に助けてくれなくてよかつたのに……！」

「あのまま続けていれば勝つていましたわ……！」

声を張り上げてまで構われたいのか、鈴音、オルコット。だが、一夏はまるで振り向く気配が無い。居ないものとして扱っているのか？だとしたら不憫すぎるな、あの2人。

「痛みはないよな、千冬姉？」

「さすがにもう退いた」

私も2人を居ない事にするか。

しばらく、一夏の氣をひきたいが為に喚く2人を無視したまま、私は田を閉じてゆるりとした時間を過ごした。

「いい加減に諦めたら？ 2人共。見てて悲しくなるよ」

目を開けると飲み物を買いに出たテュノアが戻ってきた。

「ハハハ五郎蠅いわよーー？」

「別に一夏さん構つて貰いたくてやつてこるわけではあつませんわー？」

オルゴット、駄々もれだぞ。

「……なんかゴメン。はい、ウーロン茶と紅茶ーーー！」

「虚しくなるから謝らないでよ」

「やつですわ」

酷い空間になつているな、あそこは。

……外が騒がしいな。近づいている？

私が疑問に思つていてると、大量の生徒達が雪崩れ込んできた。

「私と組もう、織斑くん」

「いや、私と」

「トコノアくん」

……保健室なんだがな、此処は。

私が頭を抱えている中、生徒達は話を進めていた。

「悪いな。俺はちふ……シャルルと組むから諦めてくれ！！」

一夏がそう言つと、生徒達は騒動を撒き散らしながら帰つて行つた。ただし、面倒なのは近くにいた。

「あたしと組みなさいよーー！」

「クラスメイトとしてこゝはわたくしと」

話を聞いていたのか馬鹿2人。

「ダメですよ」

一夏に組むように強要してくる2人を止めるように入室してくるのは山田先生。なんだか顔色が悪いな。

原因は山田先生の後から入つてきた十六夜だらうな。十六夜は私の包帯でグルグルにされた手を見て近づいてきた。

「大丈夫ですか、千冬さん？ 何かあつたんですか？ 包帯なんか巻いて驚きましたよ」

そう語りながら近づいてきた十六夜は私の怪我している方の手を両手を包み込んできた。

……凄いな。包帯越しなのにゾッとした。

私が悪寒に襲われていると、十六夜の手が一夏に弾かれた。

「怪我した部分を掴むなんて十六夜先生は常識がないんですね」

笑顔を浮かべた一夏が正論を吐き出した。

「いやいや、千尋さんの怪我がすぐ良くなるようにって祈つただけ
ですよ」

刀を持っていたならその首をはね飛ばしたいな。

事実上「対一」の戦いだと思うのだが

学年別トーナメントが始まつたんだな。

コーヒー片手にしみじみと思つ。

今までとても、とても大変だつた。

右手を負傷したのを知つた山田先生が泣きながら私に抱きついてきたのだ。

曰く、私一人ではあの仕事量と十六夜を相手にするなんて出来ませんと。

気にする」とは無い。私も無理だから。

異常に取り乱した山田先生を鎮めるのには苦労した。何せ、知らぬ間に十六夜が山田先生を連れ回して部活見学に行つていたのだから。その時の疲労や鬱憤が私の怪我を見て溢れ出したみたいだ。

私は何度も山田先生に謝り、出来る限りのサポートに徹した。他の先生方に頭をさげて手伝つてもらいもした。初めて人望があつたことに感謝をしたのだ。何があるかは分からぬ、人生。

「一回戦は織斑くんとデュノアくんペア対ボーデヴィッシュさんと篠ノ之さんペアですね」

私の隣で山田先生が嬉しそうに語る。

別に山田先生は自分のクラスの生徒同士が戦う事を嬉しく思つてゐるわけでは無い。私の右手の怪我が完治した事を嬉しがつてゐるらしい。

それでも。

「どうにも作為的なモノを感じてしまつたな」

因縁のある一夏とラウラが初戦で戦う。裏で誰かが操作しているよう思えてならない。考え過ぎか？

「大丈夫ですよ、千冬さん、真耶ちゃん。例え仕組まれたモノであつても、俺がなんとかしてみせますから」

何故か私達と一緒に空間に存在する十六夜がキリッとした顔で宣言していく。

仕事もしないくせにか？

初日から今の今までろくな事をしてない十六夜に一度も期待してないから、気張るな。とても迷惑だ。

もはや応えるのも億劫なのでアリーナの方へと目を向ける。

アリーナ内では4人の内3人が睨みあつていた。ラウラと篝は一夏を睨み付け、一夏はラウラだけを見ていた。おそらく、ラウラ以外には見えていないだろう。

試合開始と共に私の見立てが当たつた事が分かる。

篝は一直線に一夏に向かっていく。口が動いているから、一夏に対して何かを言っているのだろうな。

ただし、一夏には篝は見えない。いや、見えてはいるが相手に

してない。

一夏は飛び出し、箒の脇を通りすがる。通り過ぎてもに靈丘ボ型でダメージを与えていった。

一夏とつばぜり合になると予想していたのか、箒は間の抜けた顔をしていた。

戦場で止まるな。

私が「一夏に口をつけながら見ていると、動きを止めてしまった箒をデュノアが狙い撃つ。

「……違う?」

その光景を驚きながら見ている十六夜。

何が違うのだ?間違いでもあつたのか、自分の予想に?私としては一夏のやり方は良かつたと思うが。

迫り来る一夏にラウラは右手を突き出す。ただそれだけで一夏の突撃を止めてしまつ。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。略してAIC。日本語で言えば慣性停止能力。どんな力かと言えば、動きを止める。

ラウラは身動きが取れず的になつた一夏に肩のレールカノンを構える。

一対一ならラウラ、お前の勝ちだらう。しかし、軍人にあるまじき

見落としがあるな。

一夏の背後からデュノアが現れ、ラウラに弾丸を撃ち出す。

デュノアの攻撃がレールカノンを逸らし、またAICOから一夏を解放する。

デュノアの射撃に距離をとることを余儀なくされたラウラ。一夏が食らいつくように間合いを詰める。

2人の間に割り込む箒。一夏にブレードを振りおろす。

箒の奇襲に近い攻撃を一夏は体をすらして回避する。すると一夏の体で見えなかつたデュノアが箒の前に現れる。

箒が反応するよりも速くデュノアが弾丸の雨を浴びせる。

もの凄い勢いでシールドエネルギーを削られていく箒は急いで回避行動をとるが一定の距離感を維持したデュノアの前に敗北した。

一夏とラウラの戦い一瞬の戸惑いや慢心が敗北に繋がるものであった。

ラウラの振るうプラズマ手刀を右の雪片式型と無手の左で受け、または払う。別の角度から襲いかかるワイヤーブレードは両足で蹴つて弾く。並みの集中力ではもたない戦い方だ。

一夏の方が押されているが、ラウラが焦つているのが分かる。苦も無く勝てると踏んでいたのだろう。

ラウラは急いで両手を突き出してAICOを発動させる。

一夏を止める事に成功したラウラは自らの勝ちを悟つたのか顔から焦りが消えた。

馬鹿者が。この戦いは一夏とお前だけの舞台ではない。

デュノアがラウラの真上から弾丸を降らせてつつ、急降下してラウラの後ろを取る。

デュノアの盾の一部が外れ、パイルバンカーが姿を現す。それをラウラの背中へと突き刺す。

同時にAICOの拘束逃れた一夏が零落白夜を発動させる。

決まつたな。

ラウラの敗因は慢心。

「何でこんなに違うのさ？」

1人頭を抱える十六夜がいた。

山田先生が本気でひいているのだが……まあ良い。

私がアリーナに視線を戻すと異変が起きた。

主役は遅れてやつてやるのかよ十六夜

今アリーナに響いてこるのはラウラの絶叫。

苦しみ

悲しみ

渴望

たぶんこれらが今のラウラの心を占めているだらう。
かわいそうだ。だが、安心して良い。

「シャルル、筹、一夏は俺が助けてますから」

アリーナで起きたラウラのイベントに驚いてこむ真耶を安心させる
ように肩に手を置く。

真耶は小刻みに体を震わせ、顔には恐怖が貼り付いている。
そんな顔をした真耶が俺を見上げてくる。

やつばいな。完全に俺に期待してゐるな。これは頑張ってラウラを救
出しなきゃいけないな。

活躍に真耶。救出にラウラが俺の虜になるな、絶対に。
おつと、千冬を忘れた訳じやない。

会場内に非常事態発令を発している千冬の後ろ姿を見る。

……後ろ姿でも良い体だと分かる。

「千冬さん、真耶ちゃん、

俺が名前を呼ぶと2人共振り向いてくれる。

「行つてきまよ」

背中を向けて走り出す。

あれ、めちゃくちゃ格好良いんじゃないの俺？

アリーナ内にたどり着くと、一夏がラウラだつた黒いE.Sと剣を打ち合っていた。

一夏と黒いE.Sの距離が開くとシャルのマシンガンが火を吹く。

……おかしい。確かにシャルは一夏なんかにエネルギーを渡して戦えない状態なはず。

「意志を否定して、不細工な真似事まで。そんなに千冬姉を侮辱したいのか！！」

怒りこもった咆哮と共に一夏が雪丘式型を黒いE.Sに振るう。

「一夏、あまり無理しないで」

後方から一夏を援護するシャル。

までまでまで。これが俺の介入の結果なら、必ず出番があるはず。この状況はその為のふせんだな。なら、この戦いに介入する。

黒印を展開して、ラウラの元へと向かう。

「みんな、無事ですか！！」

みんなって言つか簫とシャル。一夏？千冬のフラグの為なら心配してやるけど。

「離れる！！」

射線に黒いEISを捉え、右手に構えたビーム砲『黒龍』を発射する。

太い閃光が黒いEISまで伸びるが回避される。

もう一発と黒いEISに狙いを定めるが、射線上に一夏がしゃしゃりでる。

「馬鹿！！一夏、退け！！」

俺がいるのになんで前に出でくるんだよ。

俺は急上昇して黒いEISの頭上に陣取る。

「ラウラ、お前を救う為だから大人しく当たれ」

上から黒龍を放つ。

黒いEISが避けるものだから、何度も黒龍を放つ。何度も何度も。

不意にEISから警告音が聞こえる。

俺が警告音に気づいた瞬間、謎の衝撃によって体勢が大きく崩れる。

体勢を崩してしまった俺に一夏はチャンスとばかりに黒いエスに突撃する。

黒いエスの刀を弾き、一夏は縦に雪片式型を構える。

主役はお前じゃないんだよ、一夏…！

体勢を素早く直して、黒龍を黒いエスに放つ。

黒龍が黒いエスにたどり着くよりも一夏の攻撃の方が速く黒いエスを切り裂いた。黒龍のビームは悲しく何も無い空を切り裂いて、地面に消えていつただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8076w/>

知らない千冬がいる世界

2011年10月10日05時55分発行